



第80回マッセ・セミナー

**高齢化・人口減少時代の  
地域活性化について**

開催日 平成23年11月21日（月）

会場 マッセOSAKA 5階 映像研修広場

講師 京都造形芸術大学芸術学部  
空間演出デザイン学科 教授 山崎 亮氏



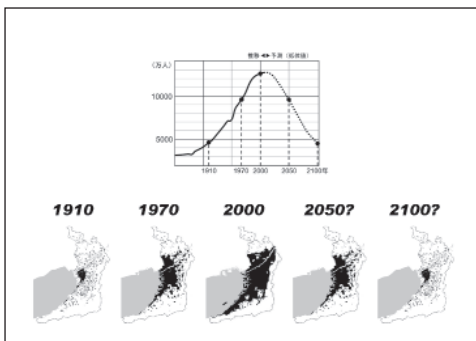
## 高齢化・人口減少時代の地域活性化について

山崎 亮 氏

(京都造形芸術大学芸術学部空間演出デザイン学科 教授)

### 1. はじめに

皆さんもご存じのとおり、日本は2050年には1970年と同じくらいの人口になり、2100年には1910年と同じくらいの人口規模になるそうです。大阪の市街地図を見てみると、これまでずっと増えてきました。1910年に人が住んでいた所を黒で塗ると、スライドのような状態です。【資料①】1970年くらいになると、千里で万博やニュータウン開発があって、黒い部分が増えていきます。2000年になると関西国際空港ができ黒い部分が広がってきました。人口がずっと伸び続けるという未来であれば、さらに大きくなっていくだろうと考えられたのですが、これから人口が減っていきます。



資料①

今、折り返しているだけです。急激な減少とはならないかもしれませんが、少なくとも、これから大きく広がっていく時代でないことは確かだと言えると思います。だから、これまでの時代と違う政策なり事業を展開していかないと、なかなかこれまでと同じような成果を出すことはできないだろうと思います。

生産年齢人口も減っていくので、公共事業も減ることは明らかです。僕は建設業界にいましたので、2006年の「国土交通白書」を見て衝撃を受けました。新しく社会資本整備、公共事業をやるお金が、2020年くらいにはほとんどゼロになると書いてあったからです。2011年に大変な出来事が東北で起きたので、建設業界の中には、もう一度公共事業が復活するのではないかと

わさをしている人たちもいますが、そうはなりません。1995年の阪神・淡路大震災の時の災害復旧費の推移を見ると、今、5兆円であっても、少しなだらかになり、また減っていただけだろうと思います。いわゆる公共事業というか、社会資本整備というハードな部分に対する公共事業費は、新設のものに関してはもう期待できません。

人口減少時代に市民協働が必要な理由は、皆さんもうご承知のとおりだと思います。人口増加時代には町のことは行政にお任せでも何とかなったのかもしれませんが、人口減少時代では任された行政の方が悲鳴を上げてしまいます。財政の方々と折衝してもゼロベースで返ってきたり、8掛けで返ってきたりする。しかし、住民からの要望はまだまだ増えるし、福祉タクシーを走らせるのをやめるなどということもなかなか決断できません。いろいろとやらなければいけないことがあるのですが、自分たちだけではできない。住民とどのように協働していくのが非常に大切になってくるだろうと思います。

今、地方分権だといわれていますが、財源はそれに伴っているのかというと、ほとんど競争的資金になっていきます。「選択と集中」という言葉がありますが、口を開けていれば交付税にくっついていろいろなものが落ちてくるという時代でなくなるのは確かです。むしろ補助金や交付金のメニューの提示に対して、ほかの自治体と競争して、日本で初めての取組や、課題を乗り越えるような提案を出し、「これは素晴らしい」となった事業にお金が付くという時代が変わっていきます。実は、大学が文部科学省に要望を出していく研究費も一緒に、ほとんどが競争的資金になっています。

そういう時代になったときに、この競争的資金を取ってくることに同時に重要なのが、その中身の半分以上に「住民とどう協働するか」という文言が書かれている点です。その対象はNPO法人や任意の協議会、任意団体など、いろいろなタイプがありますが、本当の実施主体、つまり担い手となる住民がきちんと想定されていることが必要となる場合が多くなってきます。新しい公共の担い手としてはNPOがすぐ挙がってくるのですが、NPO以外に新しい公共の役割を担う人はいないかも気になるところです。

## 2. 事例紹介1－有馬富士公園

最初に有馬富士公園の事例をお話しします。僕がハードの設計をやっている

たときに、こういうソフトのコミュニティデザインのようなことをやるきっかけになった仕事です。有馬富士公園は兵庫県立の公園ですが、兵庫県の公園緑地課から電話がかかってきたときに、間違いなく公園の設計の仕事だと思って喜んで、「はい、やります」と言いました。先ほどご紹介いただいたように、僕は今、大学の教員も兼務しつつ、studio-Lという大阪の梅田にある設計事務所を主宰しています。設計事務所の間人として、公園の設計の依頼があったのかとっていると、「設計は既に終わっている。工事も進んでいる。あなたに頼みたいのは運営計画を作る手伝いだ」という依頼だったので。有馬富士公園は有馬富士という山のふもとにある公園で、周りは山ばかりで、JR新三田という最寄り駅から歩いて30分くらいの場所になります。こんな場所に兵庫県立の公園を作っているから、「オープンした後に人がたくさん来てくれる公園になるような、マネジメントが必要だ」という指摘があった」という話でした。

事の経緯は、兵庫県知事が「こんな所に公園を作って人が来るのか」と言ったということで、その近くにある博物館の先生に「人がたくさん来る公園の作り方を教えてください」と言ったのだそうです。その先生は僕の大先輩で、公園設計をずっとやってきた方です。今はその博物館の副館長です。公園の設計の先生だから、人がたくさん来るデザインをしてくれるだろうと思ったら、「それはもうデザインの話ではないよ」と言われたそうです。「これからはマネジメントが大事になってくる。博物館にも館長がいる。学芸員がいて、企画展をいろいろやっている。それなのに公園には園長がないではないか。学芸員に当たる人が誰もいない。これからはNPOや市民の人たちが公園で何か面白い活動をやって、その人たちがファンを増やしながら新しい来園者をどんどん獲得していく時代だ。ハードで何かすごいものを作った、面白い遊具を作ったからといっても、3年くらいで飽きてしまうだろう。きちんとパークマネジメントなるものを行った方がいい」とおっしゃったそうです。「パークマネジメントは、おそらく日本ではまだ全然取り組まれていないが、アメリカなどでは常識になっている。それをやれば、日本でほぼ初めてになるだろう。初めてのパークマネジメントを有馬富士公園でやったらどうか」と。

それで兵庫県の人が「なるほど分かりました。ではパークマネジメントを手伝ってくれるようなプロの人にはどんな人がいますか?」と先生に聞いた

ところ、「そんな者はいない」と怒られたそうです。「でも、坊主にひげ面の山崎という人間がいる。あいつなら安い金でも這いつくばって、いろいろな新しい仕事をやるから、そいつに一回連絡してみろ」と言ってくれたそうです。ということで、その博物館の副館長の先生にいろいろ教えてもらいながら、有馬富士公園のパークマネジメントなるものをやることになります。

発想のヒントにしたのは、ディズニーランドはなぜうまくいっているのだろうということ。その理由はパークマネジメントなるものがきちんとしてきているからです。それにはキャストが重要だろうと思います。公園は人が行っても誰も迎えてくれませんが、ディズニーランドの場合は「ようこそ」と迎え入れてくれる人がいます。ミッキーやドナルドや、音楽を演奏してくれる人や、掃除している人も話し掛けたら結構いろいろな対応をしてくれます。普通の公園にはそれがないので、有馬富士公園はそのキャストを作ろうという話になりました。しかしディズニーランドのキャストは、お金をもらいながら歌って踊っています。一方、有馬富士公園は県立ですから、歌って踊ってくれるキャストに給料を支払うことがなかなかできません。だから有馬富士公園の場合は、お金をもらわなくとも歌って踊ってくれる人を見つけなければいけなかったのです。

そんな都合のいい人がいるのかと有馬富士公園の周りを探してみると、結構いました。NPOやサークル、クラブ活動をやっている活動団体の人たちの話を聞いて、「何か活動で困っていることはないですか。その困っている点をうちの公園が解決したら、うちの公園に来てその活動をやってくれますか」と、各団体に話を持ち掛けてみました。それで、よしそれならやってみようという人たちが公園に来て、今、自分たちのプログラムを展開してくれているのです。各団体がそれぞれファンを増やしてってくれています。

例えば「マクロ探検隊」は、天体望遠鏡などを使って、子どもたちに非常に遠くのものが大きく見えることを体験させてくれるチームです。これは全部無料です。この人たちは天体望遠鏡を誰かに自慢したいタイプの人でしょうね。家にヒアリングに行くと、それをひしひしとを感じるわけです。非常に高そうなものが並べてある。すごいですねと言うと、「これは日本で3台しかないんだよ」という感じです。「すごいですね。こういうのを持ってきて子どもたちに見せてくださいよ」と言う、「仕方ないなあ」と担いで持ってきてくれるわけです。それで子どもたちが「すげえー」と言っていると、

とてもうれしそうでした。「今日は楽しかった。また来週も来るよ」という感じで、また来てくれる。望遠鏡のおじちゃんが「また来週も来るよ」と言っていたから、子どもたちやその家族もまた来週も来てみようという感じになる。

こういう活動団体には、ほかにも会議の場所がない、チラシをコピーするのにコンビニで10円ずつ払っているなど、幾つか課題があるのですが、悩みの一つは、新しいメンバーをどのように入れるかということでした。新しいメンバーが集まらないで高齢化してってしまうのです。有馬富士公園で特徴的なのは、例えばファンになって何回か来てくれた子どものお父さんなどが、いつか天体望遠鏡に魅せられて実物を買ってしまう可能性があることです。あるいはこのメンバーに加わって、いつの間にかキャスト側に立っている可能性もあります。そうやって自分たちの活動に共感してくれる人を見つけることができる場所になっているのが、このNPOの人たちにとっては非常にうれしいと言ってくれています。

ホームページにある有馬富士公園のカレンダーに、今日は何時からどこでどの団体がどんな活動をしているということが載っています。パークセンターに行ってもその情報を知ることができます。今日の午前中は「水辺の生き物の観察会」へ行行って、午後は「森の音楽会」に入って、夕方は「星を見る会」を見て帰ろうか、というふうにプログラムに参加していてもいいし、あまり興味がなければ、遊んで芝生でお弁当を食べて帰ってもいい。そういうようなことが選べる公園になってきています。そこにはある種の仕組みも必要で、幾つかの仕組みを回していくと、活動団体の数や活動の回数が増えていったりして、それに応じて、来園者数が増えていきました。おかげさまで、最初は41万人だった来園者が、オープン5年後に69万人、今は75万人くらいになっています。

今、有馬富士公園では、それぞれのNPOや活動団体の人たちがいろいろな活動をしており、活動件数は年間720~730件ぐらいです。平均すると1日二つのプログラムがどこかで行われていることになります。当然、真冬の平日は何もやっていませんから、季節のいい時期の週末には大体5~6件どこかでプログラムをやっています。

最初に作った仕組みのまま行くわけではなく、年々変わっています。当初、部会と協議会があったのが、一つになったり、最終的にはハードとソフトを

取り扱う部会と協議会ができ、その下に事務局が置かれている形になってきました。ここに先ほどの博物館の先生や地元住民が入っています。今かかわってくれている各団体の代表が集まって公園の方向性について話し合いをしています。さらに地元の三田市の人と県庁の人、博物館の先生なども来て、協議会なるものを年に3回やっています。また、一連の取り組みをまとめた本も作っています。

さて、ここで簡単に自己紹介をします。自己紹介は、普通は最初にするものですが、どうもよく理解してもらえていない感じがしていたので、順番を変えてみました。私は大学時代、都市計画の分野の中の公園の緑地計画を学んだり、メルボルン工科大学というところでランドスケープデザインという分野で公園設計などを勉強していました。日本に帰ってきてからは、少し広い地域の生態学を学んで、就職したのは建築とランドスケープを設計する事務所でした。ランドスケープとは景観という意味で、公園や庭の設計のことを指しますが、そういうオープンスペース、屋外空間の設計と建築物の設計をする設計事務所に入りました。

その中で住民参加型の設計を学びながら、ワークショップなるものをいろいろやっていく中で、そのころからランドスケープ（景観）をデザインするという職能の名前に違和感を覚えるようになったのです。つまり、風景や景観は誰かがデザインしているものではなくて、結果的にいろいろな生活が積み重なって出来上がるものだろうから、「景観デザイナーです」というのは何かおかしいなと思い始めていたのです。ただ、ランドスケープデザイナーという肩書きくらいしか思い浮かばなかったので、独立した後も「ランドスケープデザイナー-山崎亮」とずっと名乗っていました。

ところがマルヤガーデンズというプロジェクトをきっかけに、「コミュニティデザイナー」という肩書きを使うようになりました。

### 3. 事例紹介2ーマルヤガーデンズ

マルヤガーデンズがどういうプロジェクトだったかを簡単に説明します。鹿児島市の中心市街地天文館地区に山形屋と三越という百貨店があって、その間に20の商店街が入っていました。昔から中心市街地として栄えていた地域で、ここに新幹線が入ってきてくれればよかったです。別の場所に「鹿児島中央駅」ができたのです。これはもともと「鹿児島西駅」といわれ



ていた所で、今ここに新幹線が着くようになったので、この周りに商業施設がいっぱいできています。ホテルも建つようになりました。みんな今まで天文館地区に買い物に来ていたのに、新幹線の駅側に行き物に行くようになってしまったのです。それで鹿児島三越が2009年に撤退することになりました。

撤退してそのままにしておくと、天文館地区に来る人たちがますます減りますから、商店街も危うい。山形屋という地域一番のデパートも危ういという状態で、みんなが心配していた時に、三越が撤退した後にマルヤガーデンズという商業施設ができることになりました。このご時世にデパートをやるというのは相当無謀な賭けです。マルヤガーデンズの社長は50代前半の女性で、この人の家がマルヤという呉服屋さんでした。明治時代からずっとこの場所で営業してきて、昔マルヤデパートというのをやっていたのです。そのマルヤデパートが25年前に三越と業務提携して、三越に25年間スペースを貸していました。三越が撤退してしまった後に、マルヤはせっかく地域の人たちに呉服屋さんから育ててもらったのだから恩返しをしなければいけないということになったわけです。ここでデパートをやめてしまって土地を売って逃げることになれば、商店街はみんな駄目になってしまうだろう。そこで自分がマルヤガーデンズという新しい百貨店をやりますと立ち上がりました。現在の社長は、デパートに関わったことのない全くの素人で、東京の大学からマッキンゼーに入って、実家に戻ってきていたのです。お兄さんが社長をやっていたのですが、不幸なことに亡くなってしまって、跡を継いだ3か月後に三越に撤退しますと言われたということです。びっくりしてどうしようかと悩んだのですが、親族にかなり反対される中で、やはりデパートをやるかと覚悟を決めたわけです。

そのデパート全館のデザインをディレクションしていたのがデザイナーのナガオカケンメイさんです。今までどおりのデパート運営をしても、お客さんが来ない、コミュニティという概念を入れたいいけない、と考えたナガオカさんから手伝ってほしいとお声がけいただいたのが経緯です。そのときに提案したのは、もともと鹿児島三越も最後はテナントを埋められなくなって空き店舗が多かったので、今回新しくまたお店を入れるのなら、戦略的に最初から空き店舗を作っておきましょうということでした。それは1個の店舗が入るくらいでもいいし、大きな場所でもいいのだけれども、テナント

に貸さない場所を最初に設定しておいて、ここに地域のNPOに入ってきてもらい、日替わりでいろいろな活動をしてもらうことにしたらどうだろうという提案でした。先ほどの有馬富士公園を垂直に積んであるようなものです。

つまり、デパートというのは今まで、どのように一般のお客さまをお得意さまにしていくかということに一生懸命になって、商品やサービスによる魅力を訴求していたのですが、もう既に「デパートになんて行かないよ」という人が今は圧倒的に多いわけです。ユニクロや郊外型のショッピングセンターに行って、Amazonで本を買うという人がほとんどです。この人たちに新しい商品やサービスによる魅力を一生懸命に言っても、なかなかデパートまで足を運んでくれません。それであれば、小さな単位の話かもしれませんが、個別のコミュニティの人たちがデパートでいろいろなプログラムを実施し、デパートまで来てもらうという流れにしなければ駄目なのではないかということをご提案しました。マルヤガーデンズには、テナントの質も大事だけれども、地域コミュニティの人たちが10個のガーデンでいろいろな活動をやってくれるのが大事なのではないでしょうかと話をしたのです。

それで実施したことは、有馬富士公園とほとんど一緒です。さまざまなプログラムを実施してくれる人をマルヤガーデンズ周辺で探し、その人たちの話を聞いていくわけです。朝、昼、夕方、晩、遅晩と1日5件くらいヒアリングに行って「どんなことをやっているのですか」「あなたが注目する鹿児島でもっと面白い活動をしている人を、3人紹介してくださいませんか」と数珠つなぎでどんどん紹介してもらい、いろいろな人たちに会って、この場所にきて頂き活動してもらったわけです。

最初は40団体からスタートしました。今では日替わり、週替わりでいろいろな活動が催され、年間の実施プログラム数は350件以上にのぼっています。この活動団体が自分たちのファンを呼んでくれるので、帰りに少し買い物をして帰るという流れができるということです。

マルヤガーデンズは建築家の「みかんぐみ」という少し変わった設計事務所がリノベーション、リフォームをやっています。建物自体は前のまま使っているのですが、「みかんぐみ」の竹内さんという人が設計し、改修が行われました。外側に配置した緑が垂れ下がってきて、今は壁面が緑化されています。実は屋上にも庭園があります。この屋上庭園でも、いろいろなプログラムが行われています。アーティストがいろいろな活動をしたり、外遊びで絵を



資料②



資料③

描いたり。奥に有名なブランドの洋服店があるのですが、そういうお店の壁の向こうにもガーデンがあります。ここもお店に貸してもいいのですが、現状は貸していない場所になっていて、市民がいろいろなプログラムをやっています。【資料②】各階にこういう場所があるのです。【資料③】料理教室をやる場所もあります。

屋上庭園では音楽を演奏したりもしていて、先ほど申し上げたように、外側が壁面緑化になっています。実は「みかんぐみ」は、自分たちが建築物を設計するときに、屋上庭園と壁面緑化の緑の部分、僕ではない別のランドスケープデザイナーに頼んでいたのです。僕はそのころランドスケープデザイナーという肩書きしかなかったので、ランドスケープデザイナーという肩書きで、コミュニティの人たちを集めるという仕事をやっていました。マルヤガーデンズのことがだんだんメディアに取り上げられるようになってきて、雑誌などで座談会が企画されるようになりました。関係者を紹介するときに、デザイナーがナガオカケンメイさん、建築家が「みかんぐみ」の竹内さん、そしてランドスケープデザイナー山崎亮、と外に出てしまうわけです。

そうすると建築家の竹内さんからある日、電話がかかってきました。「山崎さん、少し都合が悪い。あなたがランドスケープデザイナーとしてマルヤガーデンズにかかっていると、さもこの設計をあなたがやったようにみんなに思われてしまう。これはうちが頼んだランドスケープデザイナーがやった設計なので、あなたがランドスケープデザイナーを名乗ると少しま



ずいのだ」と言われて、確かにそれはそうかと思いました。しかし、学生のところからランドスケープデザイナーと言っているのも、ほかに名乗りようがない。しかし決定的だったのは、竹内さんが頼んだランドスケープデザイナーの名前も山崎さんだったのです。山崎誠子さんという、自営で事務所をやっている女性だったのですが、この紛らわしさはどうしようもありません。ランドスケープデザイナーの山崎が屋上庭園を設計したといたら、僕がやったことのように見えてしまう。さすがに山崎誠子さんに申し訳ない。コミュニティを集めてマルヤガーデンズを楽しくしているわけだから、「コミュニティデザイナー」と言ってみようかなと、ぼろっとそんなことを言ってみたのが経緯です。あまり深く考えず「コミュニティデザイナーあたりにおきます」と言ったのが、いろいろなところに載るようになってしまったというのが、僕がコミュニティデザイナーを名乗るようになった理由です。

#### 4. コミュニティデザインの変遷

それまではランドスケープデザイナーを名乗っており、2009年に出した『ランドスケープデザインの歴史』という本の肩書きには、ランドスケープデザイナーと書いてあります。この本を出した後にコミュニティデザイナーとマルヤガーデンズで名乗ったら、出版社からコミュニティデザインの本を書いてみないかと言われて、『コミュニティデザイン』という本を書きました。このときからコミュニティデザイナーと名乗ることにしたわけです。

そうすると、講演会をやったりテレビで紹介されたりするときに「日本で唯一のコミュニティデザイナー」などと言われるようになりました。これは少し困るなど、慌てて調べてみました。コミュニティデザインというのは今までなかったのか、本当に日本初なのか。調べてみたら、全然日本初ではありませんでした。今までコミュニティデザインはたくさん行われてきました。ただ、その言葉の意味が若干変わってきているのです。

コミュニティデザインという言葉は3世代くらい変化しています。『ビオシティ』という今度出す本の巻頭でも書いたのですが、実は1960年くらいから第1世代のコミュニティデザインがありました。ニュータウンにいろいろな人たちが入ってきたときに、バラバラに住んでいる人たちをどのように結び付けるかということで、どのように住宅を配置すれば勝手に人々が顔を合わせてあいさつをして、友達になるか、つながりができるか。つまり、人の

つながりを作るために、ハードをデザインするというのが第1世代のコミュニティデザインでした。だから「建築文化」のコミュニティデザイン特集などは、目次に「居住環境整備の必要性と可能性」「地区の構成」「整備の手法」といった項目が並んでいます。ソフトのことは一切書かれていません。だから第1世代はコミュニティセンターやコミュニティプラザなどをつくって、ハードの形をどう作れば人のつながりができるかということを考えていたのです。これは大量に人口が増えて、農家の次男三男が都市部に集まったときでしたから、「人と人のつながりを」などと言って、一人ひとりファシリテーターなどやっている時間がなかったのです。一気に人が入る箱を作らなければいけないので、その箱をどう作れば人はつながるかを検討するのが第1世代のコミュニティデザインでした。

20年後、1980年くらいから第2世代のコミュニティデザインなる言葉が出てきたと思います。このころ、専門家が住宅地やコミュニティセンターをつくるのはいいが、だんだん人口増加が緩やかになってきたので、新しい課題が出てくるのです。そんな専門家だけで公共施設をつくってどうする、住民や利用者の意見をそこにきちんと入れないのかという話になってきて「住民参加型のデザイン」ということが言われるようになりました。コミュニティの話聞いてデザインを進めていくこと、これがコミュニティデザインだと言われたのです。だから第1世代とかなり意味が違います。コミュニティの話聞きながらデザインを進めることがコミュニティデザインと呼ばれるようになったのです。ランドルフ・ヘスターという人が住民参加型のデザインのことを「コミュニティデザイン」と名付けてました。これが第2世代だと思います。だから、まちづくりで道路や公園など何かを造るといふときに住民が参加することと、コミュニティデザインがほぼイコールとなっています。

ただ、第3世代くらいまで来ると、物をつくるということなしでもコミュニティデザインと言っていいのではないかという流れになってきたのです。それがその20年後、2000年くらいから出てきているのではないかと思います。人のつながりをつくって、その地域の課題を乗り越えていくような力を付けていくこと、これはコミュニティエンパワーメントとも呼ばれるようですが、その地域の人たちが自分たちの地域の課題を発見して、これを解決し、乗り越えていくお手伝いをするようなことをコミュニティデザインと呼び始めています。だから、必ずしもハード整備を前提としないのです。第1



世代、第2世代のように、何か物をつくればコミュニティができる、物をつくってコミュニティに集まってもらうというようなことは、また少し違うニュアンスになってきたと思います。

この背景には幾つかあると思います。最初にお示ししたとおり、もうハード整備のお金がなくなっていく時代だということも若干影響しているのかもしれない。物をつくるというきっかけでしか人をつなぐことができなければ、これからは人をつなぐことができないことになってしまいます。人をつなぐということは、「何か楽しいことをやろう」ということだけでもつながれますし、その対象は自治会、商店街、NPOという旧来の地縁型やテーマ型のコミュニティもそうですが、先ほどのデパートというのも一つのコミュニティですよ。行政も1種のコミュニティです。行政職員の研修会やワークショップを1週間くらい行って、その人たちの結束力を高めることもありますが、これもコミュニティデザインではないかと思います。

企業から頼まれることもあります。企業のタスクフォースであるチームを作ったときに、この人たちの役割分担を行うプロセスが、チームビルディングだったり、リーダーズインテグレーションだったりするわけです。チームのメンバーが最高の力を発揮できるようなチームを作ることもコミュニティデザインだろうなと思います。

大学などの学校もそうです。ご紹介いただいたとおり、今、大学の教員も兼務でやっていますが、これも「コミュニティデザインをやってくれ」と依頼されたのです。集落に行くと若手が74歳という話があったり、それぞれの人たちが全然違う方向の話をすることもあります。皆さんも住民参加の話をするとうまく経験されると思いますが、漁師のおじさんが言うことと、旅館のおばさんが言うことと、八百屋さんが言うことは全然違う。これをずっと聞いていって、共通点がどの辺にあるか、みんながどの点なら賛成して「よし、その方向に向かっていこう」という話ができるかを調整していくのがコミュニティデザインの仕事だと思っています。そんな話をいろいろなところでしていたら、ある大学の学部長から電話があって、うちの大学にもそういう「集落」がいっぱいある。それぞれの学科に大学教授と呼ばれる人たちがあちらの方向、こちらの方向ばかりを向いている。だから、あなたにはうちの学科のコミュニティデザインをやってほしいという依頼をいただきました。

われわれはこれから、学生たちに一番いい教育をしていかなければいけな

い。学生たちに対して「この学校ではこういうことを勉強する」と伝え、教員は一丸となってそれを学生たちに伝えていく。その方向性がきちんと定まっていないと、学生募集ができないのです。高校生にどうやってうちの学科に来てもらうかということが言えるようになるため、今は1年かけていろいろな人にヒアリングをしているところです。

それで何となく「こういう方向かな」というのが見えてきたので、それをフィードバックして、今12人の教授とその話をしているところです。賛成する人もいますし、反対する人もいます。このあたりを調整していくのが今、学科長として僕がやる仕事です。だから、コミュニティデザインという意味では、そういう学科も1個のコミュニティだという気がするのです。一個一個がどんなコミュニティであっても、そのコミュニティの人たちの結束力や力を強めて、目の前にある課題をどう乗り越えていくか。これをやっていくというのが第3世代のコミュニティデザインです。つまり、ハードを必ずしも前提としないコミュニティデザインだと感じています。

スライドにはおおむねこんな方法でやっているというのを示していますが、方法は毎回違います。【資料④】このように進むことの方が珍しい。まずはその地域を理解するために、コミュニティのヒアリングをします。大学の先生や漁師のおじさんなど、いろいろな人に話を聞きます。徹底的に聞いた後で、ワークショップなどをやって、みんなの意思を共有します。さらにはチームの結束力を高めていきます。チームビルディングのようなことをやって、最終的にはそのチームが自分たちで活動を展開していけるように、初動期のサポートをするのです。これが住民であっても、行政職員の若手であっても、あるいは総務課だったとしても、このコミュニティを築いていくために僕らはそこへ入って、その人たちの意見を統合させて、意思疎通がうまく図れるようにして、その人たち自身がきちんと遂行できるような状態になっていけば、去っていくことをやってい



資料④

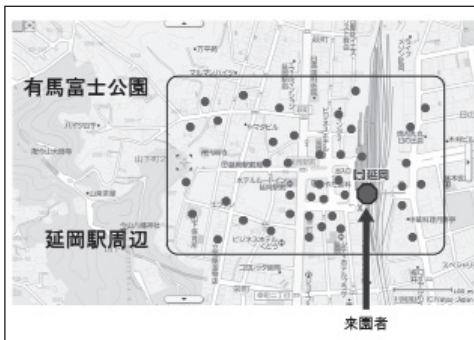
い。学生たちに対して「この学校ではこういうことを勉強する」と伝え、教員は一丸となってそれを学生たちに伝えていく。その方向性がきちんと定まっていないと、学生募集ができないのです。高校生にどうやってうちの学科に来てもらうかということが言えるようになるため、今は1年かけていろいろな人にヒアリングをしているところです。

ます。これが大体の手順です。

ただ、地域ごとにそれぞれ違う特徴がありますので、ヒアリングに入らない方がいいなと思う場所もあります。そういう場合はもう少し違う方向からアプローチするなど、幾つかカーブを投げながら仕事をしています。

### 5. 事例紹介3－延岡市の中心市街地

それをまちづくりに適用してみようということで、今盛り上がっている一つの例が宮崎県延岡市です。延岡市の人口は約13万人です。駅前に3つの商店街があるのですが、大体、空き店舗だらけでシャッター街がつながっています。みんな買い物は大型のショッピングモールへ行きますから、商店街には来ません。電車は1時間に1本程度なので、あまり使いません。ほとんど車です。この中心市街地をどう活性化するかという相談があったので、これは有馬富士公園のようにしてみるのがいいのではないですかとお答えしました。有馬富士のように、駅から離れたところに年間75万人もの来場者が来ているのです。駅前なら便利ですしもっと人が来るんじゃないですかという話をしました。有馬富士公園は400haという大きさがあります。この枠をそのままの形で延岡駅の周辺に当てはめると、どれくらいの大きさになるだろうと考えました。【資料⑤】



資料⑤

の中にデジタルサイネージなどがずらっとあって、「今日は駅前でこんな活動をしています」「駅裏でこんな活動をやっています」「商店街の空き店舗でこんな活動をやっています」「近くの神社や畑ではこんな活動をやっていて、近くのカフェでは畑で取れたものでこんなことをやっています」

「この辺の二つの団体が一緒になって何かやっています」という情報があって、みんながそういうものに参加しながら、ちょっと帰りに商店街で買い物をして帰るといった動きを作ることができるのではないかと思ったのです。

延岡市中のNPOやサークル活動をやっている人たちが、みんなの知らない



い公民館などを借りて活動するのではなくて、どうせやるなら駅前でやりましょうよと誘って、駅前に集合してもらうとやっている。これをみんなで協力してやらないと、駅前の商店街はこれからどんどん衰退していってしまいますよという話を住民の方々としているところです。かなり共感してくれています。

去年からスタートしているのですが、スタートしたときに50団体から100名以上が来てくれました。この団体の人たちと、町の将来についていろいろと話し合っています。大型のショッピングモールが大体何年くらい商売して、撤退しているか。行政の、大規模商業施設の規制の担当の方ならよくご存じかと思います。多くの店舗は、鉄骨で組んで外側にぺたぺたパネルを張っていく「パネル工法」を用いており、その寿命は大体20年です。

不動産関係の方ならよくご存じですが、大規模商業施設は土地を買わないことがほとんどです。定期借地で借ります。定期借地権の設定も大体20年です。事業計画を見ると分かるのですが、大型ショッピングモールの事業計画で、何年で累積黒字になるか。20年です。ぴったり一致しているのです。だから20年間の間に累積で黒字になると、大体パネル工法の寿命が来るので、このときリニューアルするかどうかを決めるわけです。同時に土地を借りている期限が20年で切れますから、このときあまり売り上げが芳しくなければ、撤退しますし、繁盛していれば、さらに更新するでしょう。

だからいけないと言っているのではなくて、僕も買い物に行きますし、買い物に行くこと自体は悪いことではないと思うのですが、問題は20年後にそれらが撤退したとき、皆さんはどこに買い物に行くかということです。その20年の間に商店街はきれいに空き店舗だらけになりますから、大型ショッピングモールがなくなったときに、車を運転できないような年代の人たちは、一体どこに買い物に行くのでしょうか。インターネットが非常に得意で、買い物ができるスキルをこれから身に付けるのであれば、インターネットショッピングで商品も見ないで買い物し続けられるかもしれませんが、なかなかそうはなりにくいと思えば、商店街を元気にしていくことは、実は商店街の人たちだけの問題ではないのです。そこはやはり市民の人たちが力を合わせて、大型ショッピングモールに買い物に行く一方で商店街を元気にする必要があります。この両方ができるように選択肢を増やしておかないと、将来自分たち自身が困ったことになるのではないかと、延岡の人たちとはずっ

とそういう話し合いをしています。

その50団体の人たちはかなり危機感を持っていて、われわれが立ち上がって駅前で何か活動すれば、いろいろな人たちが来て、商店街で買い物をして帰ってくれるということを感じてくれています。今後、空き店舗でこんな仕事をしてみたい、こんな起業をしてみたい、こんなカフェを開きたいという若い人たちがそこに来る可能性も出てくるでしょう。「駅前へ行けば何かやっている」という状態を作り出せるのだということを信じ始めてくれています。初回のワークショップで、100名以上からスタートしましたが、その後みんな仲間を呼んできてくれていますので、ほとんどワークショップの体を成していません。席の間が5cmくらいしかないので、ワークショップの会場を歩き回ることほとんどできない状態になってきています。しかし、みんな意識を持って集まってきていますから、これは平成27年度に完成する事業なので、これからもどんどん増えていくでしょう。それだけ多くの団体が駅前で何か活動することになれば、平日の昼間でも5団体くらいは何かやっているでしょうね。週末なら20団体くらいは駅前では何かやるのではないのでしょうか。だから駅前に行けば誰かが何かやってくれるだろうなという状況を、常に生み出すことができるのです。

年に2回くらい、1週間程度の期間でフェスティバルをやってもいいかもしれません。春と秋と、季節のいい時期に、延岡駅前で活動する団体が一堂に会して、その人たちがきちんとそこでいろいろなプロジェクトをやっているという1週間を作る。5万人くらい人が来るような、そんなものを作ることもできるのではないかと思っています。

そこで、市民が立ち上がっていくのをどのようにサポートしていくかが非常に大切になってくると思います。町の公共空間は、戦前までは町内会、婦人会、商店街、自治連合が様々な形で使ってきました。町の公共空間で会えばあいさつするし、縁日や祭りもできる。いろいろな人たちが公共的空間で多様な活動をしてきたのですが、戦後どんどんこういう地縁型のコミュニティが霧散していきました。大阪でも、自治会の加入率が下がってきていて、祭りが成立しなくなった、若い人たちがいなくなってきた、子ども会もなくなったということが多いのではないのでしょうか。こうしたことによって、今まで公共空間、まちの空間を使っていろいろなことをやっていた主体は、実は見えないところでぼろぼろと消えていっているのです。

僕はランドスケープデザインをやっていますから、この公共空間のデザインをずっと考えていたのです。戦後あまり使われなくなってきた広場や公園が多い状態を、デザイナーとして見ていると、公園のデザインが時代に合わなくなってきたのだと思うわけです。だから、この公園を刷新して、あるいはこの広場のデザインを新しくして、今の時代の人たちが使いやすいように変えれば、またかつてのようにみんながここを使ってくれるだろうと、一生懸命デザインを施します。ところが幾らやっても何となく閑散とした広場ができてしまう。あまり使われない広場が増えていってしまうのです。

これは、この外側を見なければいけないと思うのです。もう既に家の外へ出て何かをやるという人たち自体が相当減っていますから、その場所のデザインどころの問題ではないだろうと。むしろNPOやサークルや企業や大学など、テーマで集まったテーマ型のコミュニティの人たちがどのように公共空間にかかわるか。この辺でかつてのように、まちの外の空間にかかわる主体をどんどん誘っていくことをやらないと、町がにぎやかになることはないのではないかと思います。放っておいても商店街が活性化したり、駅前広場が毎日面白いことが行われる場になるということは、もうあまりないのではないのでしょうか。ある種の仕組みがないと、そこには新しい主体がかかわってこれない気がします。

だから公共空間がどんどん駄目になっていく前に、何かこの状態を担保するための仕組みを周りから設定してあげなければいけないのではないかと考えています。例えば、そういうサークル、企業、大学がかかわるために行政は何ができるのか、土地の所有者は一体何ができるのか、そしてそれをコーディネートする人はどういう活動をするべきなのか、ということも考えるべきことのひとつです。これは地域のNPOでもいいし、われわれのようにコミュニティデザインをやっている人間でもいいかもしれません。この人たちがそれぞれにWin Winの関係になるような関係性をつなぎながら、公共空間をにぎやかに楽しくしていく。中心市街地の活性化でもいいかもしれません。また、孤独死などの防止や予防治療、地域医療といわれるようなもので、それぞれの人たちが家から一步外へ出ていくこと、あるいはそこで誰かとつながる関係性を作っていくことを、この公共空間を使ってやりませんかということが、これからわれわれが取り組まなければいけないことなのです。もちろんここの中のデザインがどうかということも大事といえば大事で

すが、そちらのことばかりやり過ぎてハード偏重で話を進めていくのでは、多分これからの仕組みは作っていけないのではないかという気がします。

町のいたる所でいろいろなことが行われている状態がもう一度戻ってくると、まちに活気が出てきますし、それが仲間づくり、共同作業、自己実現、予防医療の場にもなるでしょう。自然災害に対して、例えば安心安全をどう守るのか。自助、共助、公助のような関係性を日常的に一体どう作っていくのか。生活習慣病やメンタルヘルスの部分はどうしていくのか。人と人の結び付きがあって、誰かに相談できるという広い関係性をどう作っておくのか。このことが多分コミュニティデザインとして最終的に目指すべき方向性なのだろうなという気がしています。

設計の仕事やパークマネジメントをやっていたところ、まちづくりの分野に広がるようになってきて、その結果、かなりたくさんの人たちと話をして友達になりました。僕は日ごろからこうやって住民の方々と話をするのが仕事ですが、親しくなれば総合計画を住民の人たちと一緒に作ればどうかと誘われるようになってきて、今は総合計画作りの仕事をするようになっています。

## 6. 事例紹介4－海士町、横浜市、墨田区

最後に海士町の総合計画作りの話をしようかと思っています。私がデザインを手掛けた場所を人口別に表してみると、コミュニティデザインは人口には関係ないと気付きました。一番少ないのは5世帯9人です。五島列島の半泊集落というところの活性化をしてくださいというものでした。隠れキリシタンとカトリックと浄土真宗と宗派がバラバラな3世帯があり、この人たちが一切口を利かないという所でした。最年少は74歳の方でしたが、ここに56歳というぴちぴちの若手がIターンで入ってきたのです。若手の夫婦が二人で入ってきて、この人たちが集落を活性化しようと思い、一生懸命みんなに「一緒に何かやりましょうよ」と話し掛けるのですが、うまくいかない。だって、江戸時代のころからその3宗派はけんかしていますから。それで今でも口を利かないし、目も合わせないのです。これはもうどうにもならないということで、市役所に相談し、そして長崎県庁から補助金をもらえることになりました。こういう場所でも活性化できるのなら、他の地域の参考になるだろうということでモデル事業をやることになり、うちに相談の電話がか

かってきたのです。取り組みを通じて、今は女子会ができました。70歳くらいのおばあちゃんたちが4人集まって女子会と言っています。本人たちはかなり楽しそうにやっています。

ほかに横浜の東横線の跡地の事例もあります。人口300万人くらいの所で、JR根岸線と東横線が並行して走っていましたが、その横浜駅から桜木町駅までの間が、このプロジェクトの舞台です。みなとみらい線ができたので、同じルートを走っていた東横線が廃線になり、その廃線跡地を横浜市が買い取ったのです。そしてその高架になっている線路3.1kmを細長い公園にする話が持ち上がりました。ニューヨークにハイラインという事例があります。しかし、ハイラインと全く同じようなことをしても仕方ないということで僕らが呼ばれて、ここに横浜市中のNPOや活動団体がずらっと並んで、日々いろいろな活動をやっていくような空間にしようということになりました。3.1kmを10mくらいずつ切っていくのです。だから、散歩するといろいろな活動をずっと見ていくことができる場所をここに作っていこうということで、今、横浜の3,000くらいある団体の人たちのところを回っています。ワークショップをしたりして、みんなで東横線の空中、11m上で面白いことをやりましようと言って誘って回っています。

ここはみなとみらいの方と山手側をちょうどつなぐ所にあるので、たくさんの人たちが来るのです。今、健康をキーワードにして、みんなで歩くためのルートを作っています。このルートの中に11m上の空中の遊歩道を位置付けて、みんなでここを歩いていくということですが、歩くだけではなくて、実はそこにおもてなしをするNPOがいっぱい並ぶという計画をやっています。

次に、墨田区の事例を紹介します。墨田区の人口は25万人くらいですが、ここでの食育計画が今面白いことになっています。実は先ほどから言っている四つのやり方が少しずつ変形しているのです。プロジェクトごとで、やり方がかなり違います。だから皆さんがもし何か住民参加型のプロジェクトをやろうと思えば、そこに何か方程式があるというわけではなくて、住民の人たちからまずは話を聞いて、どういう人とどういう人をつなげていくのか、今回はどんな事業をやるのが一番優れているのかというのをその都度判断していかなければいけません。これがソフトの事業をやるときのキーワードではないかと思えます。



海士町のプロジェクトについてお話しますが、これは総合計画を作るといふことと呼ばれたものです。境港市という「ゲゲゲの鬼太郎」で有名な所から船で3時間半くらい北上した場所にある島です。単独町制です。隠岐諸島には隠岐の島町、西ノ島町と幾つか地図上に島があり、合併協議をしたのですが、結局それぞれ単独でいくことに決めました。しかし単独町制は結構厳しいのです。借金も103億円あったところですが、その借金をどんどん返済していくために、町長が自分の給料を半分にして、課長級の人たちはみんな7割にしてということをやってきた人たちです。浮いたお金を攻めに使うということで、Iターンで来る若い人たちの仕事に使っています。他にも面白い取り組みをいろいろやっていて、地域活性化で優等生と言われてます。この海士町の町長に、2007年に呼ばれました。

海士町はうまくいってそうだなと思っていたのですが、町長には幾つかの悩みがありました。そのうちの 하나가、Iターン者をいっぱい呼んできているが、地元でずっと住んでいる人たちから「役場はIターンにばかり甘い。ひいきしているのではないか」と反発が多いことだそうです。地元の人たちはIターンの人がどんなことをやっているか、あまり知らないのです。地元でずっと住んでいる人は、Iターンの人たちに対してある種の偏見もあるのです。

Iターンの人もやはり地元の人たちと何か一緒にやりたいから、「おはようございます」とあいさつをするのですが、地元の人には顔をそむけます。そうするとIターンの人たちは、「自分たちは嫌われているのだ」とショックを受けます。2~3回はトライするのですが、だんだん「もう私は駄目だ、嫌われている」と思って、そこから先あいさつしなくなります。そうすると、「あいつはあいさつもしない」「礼儀正しくない」と言われるのです。

もともと顔をそむけるのは、恥ずかしいからです。中山間・離島地域出身の方はよくご存じだと思います。この地域の方は、あいさつされても恥ずかしいからすぐ顔をそむける方も多いです。Iターンの人たちも、無視されても無視されてもあいさつしなければいけないのですが、2~3回でくじけてしまいます。そのあたりずっと間が埋められないのです。

一番困っているのはUターンの人です。Uターンは一回地元を捨てた人間だと地元では認識されています。しかし、一度外を経験している人間ですから、島の良さもいろいろ分かっています。だから、外から入ってきたIター

ンの人の方が感覚としては合うのです。こちらは「海士町はこの辺がいいよね」という話がきちんとできるのです。しかし、地元の人はそれがいいということに気づいていません。「そんなもの何がいいのか。当たり前ではないか」と思っている。

Uターンの人は心が揺らいでいます。あんまりIターンと仲良くし過ぎると、もともとの地元の友達たちが「おまえもそちら派か」という感じになってしまう。しかし、地元の人とばかり仲良くしても意見が合わないということで、地元継続居住者、Uターン、Iターンがそれぞれあまり仲良くできない状態だったのです。

今度総合計画を作るので、その三者をうまくミックスして友達にしてくれないかというのが町長からの最初の相談でした。それは大事なことからやりましょうということで、総合計画作りのチームを分けました。そのとき、人、暮らし、環境、産業とそれぞれのテーマにしたのですが、このテーマに沿ってそれぞれどんな人がここに入ってきそうかなとあらかじめ予測し、キーワードを設定しました。事前にいろいろヒアリングインタビューをしているので、誰がどんな意見を出しているのか分かるのです。この人はきっと教育に興味があるだろうな、この人は高齢者福祉に興味があるだろうな、この人はどう考えても産業振興に興味があるだろうなと。それで100人くらいインタビューした結果、出てきた話を100人分全員覚えておいて、どんな割合にするとIターン、Uターン、地元継続居住者で同じくらい的人数が集まるかを考えるのです。なおかつ14歳から71歳まで来てくれますから、どんなキーワードを掲げると、大体年齢構成が同じくらいになるか、かつ男女比率が大体同じくらいになるか、自然とそういうチームが出来上がるかをこちらでいろいろ考えました。

そして、人、産業、環境、暮らしという四つのキーワードを掲げて、「では、それぞれ行きたいテーブルに行ってみてください」と言ったところ、おおむねそれぞれのテーブルに分かれて入ってくれました。このようにして、Iターン、Uターン、地元継続居住者がそれぞれ同じくらいの比率で、男女比も同じくらい、年齢構成も同じくらいになっているというチームの作り方をしました。

そうでないという意味での競争が生まれないので。それぞれのチームが「あちらは若い人がいっぱいいるから、パソコンで何かいろいろできるだろ

うが、こちらは高齢者ばかりだからそんなことはできない」と言って、なかなか一方のプロジェクトが進まないことになってしまいます。男女比も同じことで、条件を同じにして、それぞれを刺激し合って、「あのチームは結構プロジェクトが進んでいるらしい」といううわさを残りの三つのチームが聞いて、焦り出すという状態をうまく作らなければいけないと思っていました。

結局オフィシャルには8回ワークショップをりましたが、ワークショップのやり方を住民の人たちに伝えて、その人たち自身が自分たちでワークショップを非公式にやれるようになりました。非公式には40回くらいワークショップをやったようです。僕も知らなかったのです。ご飯を食べながらとか、家に集まってとか、KJ法とか、ワールドカフェなど、住民の人たちが自分たちでやり始めたのです。それで40回以上集まって、合宿などをして、総合計画の内容を作って提言したりしています。また、総合計画ですから策定委員会ではなく、議会を通しています。

それで「島の幸福論」という総合計画を作りました。このタイトルは、都市部で目指している幸福の指標と、海士町が目指している幸福の指標は違うだろうという考えから来ています。海士町の強みだと感じているところを施策の中にどんどん入れていこうとしています。都市部であれば学歴が重視されている。なぜ学歴を高くするかというと、所得がたくさん欲しいから。大阪だと大学を卒業している人がなぜあんなに多いのだろう。しかも、中には大学院を卒業している人もいるらしい。なぜあんなことをする必要のあるのか。それは少しでもいい給料が欲しいからではないか。なぜいい給料が欲しいのか。それはやはり広い家に住みたいし、少しでも自然豊かな所に行きたいし、少しでも安心安全な食べ物を食べたいからだろう。しかし、大阪辺りでは、そんな広い家に住めてないのではないか。新鮮な野菜を食べられているのか。東京で安心安全な野菜なんて食べられるのかといった話をしていることがあります。つまり、東京や大阪が目標にしている部分を海士町は既に持っているのです。広い家も1か月5,000円で借りられます。自然も豊かだし、逆に手入れをしないと仕方ないという状態になっています。安心安全な社会もありますね。こういったものを自分たちは既に手に入れているのだから、大阪と比較して学力を伸ばそう、所得を伸ばそうとする必要はないだろう。確かに海士町は中卒が当たり前で、高卒も珍しいくらいです。これは住



民の人たちでプロットしたものです。【資料⑥】別にきちんとしたデータがあるわけではありません。「この辺かな」というところにプロットしました。

海士町の政策は、都会に追いつけ追い越せではなくて、自分たちの有利な点を生かして、東京や大阪にいる人たちがうらやましくなるくらいリッチな生活を展開してしまうということに決めて、総合計画を作りました。そして先ほどの四つのチームが作ったわけです。

ところが、そのままだと何課がどの事業を担当するのか分からないので、各課の方に入れ替えてみて、住民とどれを一緒にやるかを整理しました。スライドの一覧表の横に細かい文字が書いてあります。【資料⑦】ページ数と「別冊」と書いてあるのは、別の本に書いてある内容です。住民参加で進めるプロジェクトについてはこちらに挙げてあるということです。別冊があり、この中にそれぞれのチームが「やります」と言ったことが書いてあって、住民が提案したからには実際にやりましょうということを進めています。

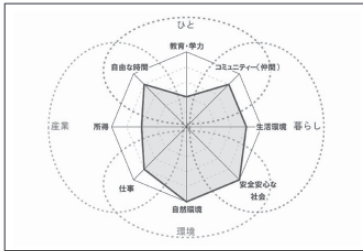
そして、何か活動したら必ずニュースレターを作ろうと言っています。これは島内のほかの人たちに広めていくのと同時に、先ほど言ったとおり、「自分たちのチームはここまでやっている」という進捗を示し、ほかのチームにプレッシャーを与える目的もあります。「おいおい、産業チームは炭焼きまで始めたらしいぞ」などということが暮らしチームに伝わると、暮らしチームも急ぎょ会合をやって、「うちもちょっとやろう」という話になるということで、それぞれがいい意味で競い合っています。

お誘い屋さんというものも設けました。恥ずかしがり屋の島の人たちを、クリスマス会や餅つきなどに誘って回るチームです。何かあればコンコンと戸をたたいて、「来てください」と誘って回ります。環境チームは、水質や水量を大学と一緒に研究しています。島では水が貴重だからです。また、「名水サミット」のようなことを裏方役でやっていたりします。海士人宿（あまじんじゅく）は人チームがやっている取り組みです。保育園の跡地を改修して、みんなが集まれる場所をつくっていきました。先ほど出たしゃもじのイラストですが、海士町ではしゃもじを持って踊るキンニャモニャ踊りという踊りが盛んなので、これをイラスト化したものです。イラストののだけれども、顔が全部違います。顔はそれぞれ提案した人の顔に似せてあります。

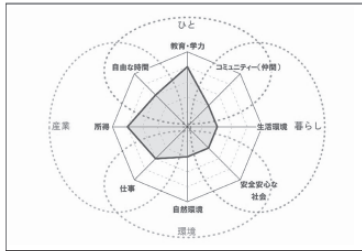
第四次 海士町総合振興計画

# 島の幸福論

—海士ならではの笑顔の追求—



海士町の目指す幸福の指標



都市の目指す幸福の指標

資料⑥

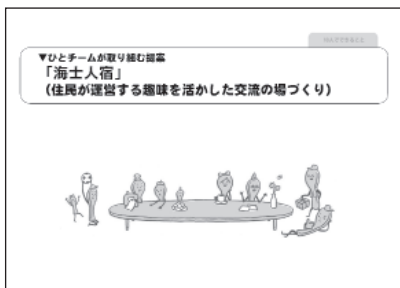
## 海士町第四次総合振興計画「分野別体系図」

P 30-31

分野別体系図		分野	経費	編成	
島の幸福論 海士ならではの笑顔の追求	教育	学校教育	施設1	進めること連携推進の推進	1442.70
			施設2	人材育成支援推進の推進	1743.36,41,42,74
	施設教育	施設3	幼保と連携した児童教育の推進	1427.70	
		施設4	職業・職業訓練に関する推進	1770	
	施設教育	施設5	生涯学習推進の推進	1422.20	
		施設6	暮らしがいつでも学べる生涯学習の推進	1732.24,40,42,70,80	
	施設教育	施設7	文化活動の推進と地域文化の推進	1446.80	
		施設8	文化活動の推進と地域文化の推進	1446.80,70	
	産業	ももぐり(一次産業)	施設9	産地直営生産者支援づくりの推進	1706.00,100
			施設10	産地直営生産者支援づくりの推進	1702.44,46,66
	施設教育	施設11	ももぐりに関する人材育成の推進	1726.40,46	
		施設12	産地直営生産者支援づくりの推進	1444.44,46	
	施設教育	施設13	産地直営生産者支援づくりの推進	1704.24,39,80	
		施設14	産地直営生産者支援づくりの推進	1446.80	
	施設教育	施設15	産地直営生産者支援づくりの推進	1444.83,80	
		施設16	産地直営生産者支援づくりの推進	140	
	保健	高齢者福祉	施設17	高齢者の内閣へのネットワークによる新しい生活支援の創出	1704.24
			施設18	高齢者の内閣へのネットワークによる新しい生活支援の創出	1700
	施設教育	施設19	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1706	
		施設20	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1700,24	
	施設教育	施設21	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1700	
		施設22	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440,42,80	
	施設教育	施設23	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440	
		施設24	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440	
施設教育	施設25	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設26	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設27	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設28	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設29	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設30	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設31	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設32	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設33	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設34	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設35	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設36	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設37	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設38	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設39	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設40	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設41	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設42	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設43	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設44	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設45	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設46	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設47	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設48	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設49	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設50	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設51	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設52	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設53	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設54	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設55	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設56	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設57	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設58	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設59	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設60	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設61	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設62	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設63	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設64	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設65	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設66	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設67	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設68	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設69	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設70	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設71	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設72	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設73	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設74	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設75	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設76	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設77	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設78	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設79	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設80	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設81	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設82	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設83	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設84	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設85	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設86	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設87	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設88	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設89	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設90	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設91	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設92	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設93	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設94	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設95	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設96	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設97	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設98	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
施設教育	施設99	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		
	施設100	高齢者に寄り添った生活支援の推進	1440		

資料⑦

【資料⑧】 この中には、「おれは絶対やらない」と言っていたのですが、この人が入ってきてくれば、その周りの面白い人がいっぱい入ってきてくれると考え、引っ張ってきた人や、行政のやることが嫌いなので行政の話だと言ったら「絶対嫌だ」と言っていたのですが、「まちづくりが好きだ」という人ばかりがいっぱい集まってもバランスが取れないとって引っ張ってきた人もいます。



資料⑧

それで「まちづくりについて話し合う人！」と、メンバーを公募したところ、まちづくりが好きそうな人が手を挙げてくるわけですが、そういうところに先ほどの二人のような人が入ってきてくれたのです。そして、「そもそもまちづくりとは」などと演説を始めると、横から「うるせえ、意味が分からねえ、簡単に話せ」などと言ってくれるわけです。これはいい関係です。そういう人たちがどんどん入ってきてくれないと面白くなりません。

この人が、人チームの海士人宿という、保育園の跡地を改修して、常にいろいろなことをここで集まって活動し、人の関係が作れるような場所をつくるプロジェクトのリーダーをやっています。【資料⑨】これはみんな自分たちでやりました。【資料⑩】設計は若干手伝いましたが、ほとんどそこにいる人たちだけでチームでやりました。海士人宿というのを作っています。

【資料⑪】このリーダーの方は、下水道の会社の社長をやっているのです



資料⑨



資料⑩



資料①



資料②

が、たまにここへ来てはバーをやっています。この人たちもその仲間なのです。この人はUターンの人で、海士町出身で、イタリアで料理の修行をして帰ってきた人です。【資料②】この人も海士人宿で2か月に1回、イタリア料理のお店をやってくれています。あとバンドが来て演奏をしてくれたりしています。

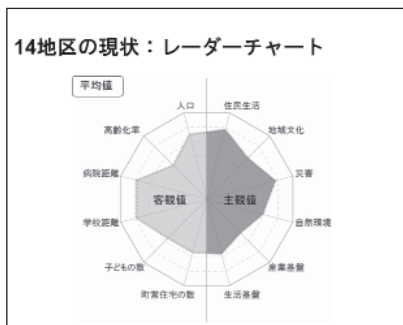
若い人が集まって勝手に楽しいことをやっているように見えるのですが、これは総合計画に位置付いた、引きこもりなどの防止の授業です。これは各集落の人たちが議会を通じて賛同してくれていますので、町の年寄り衆がみんなここに出てきます。だから、きっかけは何でもいいのですが、集まれる場所があるということで、家にずっと引きこもってしまっている人を外に出さないといけないということです。「あの人、最近来ていないけど、大丈夫だろうか」という話ができる関係性を作っていくことをここでやっています。

いろいろなプロジェクトが進んでいます。高校の魅力化プロジェクトもあります。これは全部住民が提案したもので、住民自身が今進めていっています。海士町の高校がなくなるかもしれないという危機がありました。そうすると合併して本土の高校に行かなければいけなくなります。高校3年間のふるさと教育も大事だということで、市民と僕らもお手伝いして、「島留学」というコンセプトを生み出しました。東京や大阪にいる中学生の親御さんたちに、スイスやオーストラリアに子どもを留学させるのも悪くはないけれど、海士町の高校に留学させるというのも一つの手ですと勧誘するので。そんな遠い所に留学させなくても、ほとんど海外のような体験ができますから、ぜひお子さんを海士町の高校に行かせませんかというのを、全国の中学校にPRしました。こうした取組がなければ、高校が存続しなかったで

しょう。

去年の受験者数は爆発的に増えて、受験生を落とさなければいけないという事態になりました。海士町の中学生が落ちるかもしれないということになって、慌てて海士町は公営塾を開きました。役場が塾をやって、徹底的に指導したのです。何とか海士町の中学生は全員合格しました。外からの高校生も「留学」してきています。地域創造コースという、高校を卒業してこの地域で活動するコースと進学コースとの二つのコースで、海士町の高校が存続しています。これも住民の人たちが提案したプロジェクトです。

こうした中で、若干気になっているのが、この活動に参加していない人たちです。海士町は人口2,300人の島です。最初大体100人の人たちが集まって、こういうワークショップをやりました。その後プロジェクトが進むと、いろいろな人たちが「楽しそうだから」と集まってきてくれました。今は300人くらいの人たちが総合計画のプロジェクトに携わっています。2,300人中300人の人たちが結活動してくれているのですが、僕らが気になるのは残りの2,000人の方です。この人たちは集落から平場に降りてくることすら厳しいというところがあります。海士町は全部で14集落ありますが、この中には限界集落もたくさんあるのです。今度はこういう集落についてケアしなければいけないのではないかとということで、去年からそのプロジェクトを立ち上げています。



資料⑬

14地区を調査してレーダーチャートを作りました。【資料⑬】集落の人口、高齢化率、病院・学校までの距離、子どもの数、町営住宅の数。多ければ多いほど、値が大きくなります。だから人口が多くて、高齢化率が低くて、病院が近くてという場合だったら、条件としては恵まれています。逆にそうではないとチャートが小さいですね。その集落の人たち

たちに、生活で困っている点はないか、農家は維持できているか、災害に対する備えはできているか、自然環境の管理はできているかなどのお話を聞きました。「おれらは結構できているよ」とやる気満々の人たちがいる集落では、

値が大きくなります。これで14集落の特徴を大体見てみるということをやりました。

ある集落のレーダーチャートを見ると条件は非常によく、恵まれています。ところが本人たちは若干やる気がなくて、もったいないと感じました。そういうことがそれぞれのレーダーチャートから分かってくるのです。これから取り組もうと思っていることは、どこの誰が何を協力するかということです。とにかく、集落ごとにいつからやるかという話を聞いて回っています。ヒアリングに行って集落の人たちと話をしていますから、これからどうしていくかということを考えていくのです。

それぞれ集落によって特徴があるのです。両方ともまずいという場合もあります。条件としても厳しいし、本人たちももう駄目だと言っているところもあります。こういう集落は特に集落の人たちと話をしていって、活性化を目指すべきなのか、それとも自分たちの集落を自分たちの力できちんと閉じていくのかを考えなければいけません。最後の1人まで苦しめないように生活をサポートしながら、その集落で培われた伝統や文化や芸能をアーカイブ化して、最後どう閉じていくのか。これも集落の人たち自身が決めることです。僕らでも行政でもなく、集落の人たち自身が話し合っただけで決める。そのための情報を僕らは提供しなければいけないというのが今取り組んでいるところです。

14の集落があるので、大体7人くらい集落支援員がいれば、1人2集落ずつ面倒を見ていくことができますので、海士町に6人の集落支援員を雇ってもらいました。これは総務省の事業です。もう1人はうちの事務所のスタッフが入って、合計7人です。これで今、全集落の相談に乗っています。島の外から4人、地元から2人の応募があったのですが、2人のうち1人が先ほどお話しした、最初「おれは絶対やらない」と言っていた人だったのです。かなりびっくりしました。2007年から2年くらいずっと総合計画作りに関わりながら、Iターンの人たちなどと話をし、やはりきちんと集落の面倒を見なければいけないということに気付いたそうです。下水道の会社をやっていますから、合併浄化槽などのチェックに行くのですが、行けば行くほど集落の人たちが困っているということをよく見てきたのですね。「何かやらなければ」とずっと感じていたらしいのですが、しかし「そんなのおれのやることじゃない」と思っていたそうです。しかし、総合計画作りをきっかけに、

「やっぱりおれはこれをやらなきゃ」と思い立ち、下水道の会社をスタッフに任せて、「おれは集落支援員をやる」と言って応募してきたのです。

役場の若手30人と集落支援員6人とで、一緒にコミュニティデザインをやりました。集落支援員の人が課題を持ち帰ってきたら、役場の各課の若手と一緒に相談をして、解決するための取り組みをスタートできるネットワークをつくっています。

島根県は、日本全国の高齢化よりも10年早く高齢化、超高齢社会に入っていて、海士町はそれよりさらに10年先に高齢化しています。だからこの最先端の場所で集落支援員が全く新しいプロジェクトを立ち上げて、成功させたら、これは全国のモデルになります。20年後には全国が追いついてくるのだから、あなた



資料⑭

たちは非常に大事なプロジェクトに取り組んでいるという話をしました。写真の撮り方、動画の撮り方、文書の書き方、このようなことを学んでもらって、集落支援員が7人誕生しました。【資料⑭】

中には、杖を突かずに歩ける人は2人しかいないという集落もありますから、道端に座り込んで話をずっと聞くこともあります。お墓はもう今、整理し始めています。平場に下りてきて、集落を閉じる準備をしている人たちもいます。これからどうしていくのかということを考えなければいけません。

崎という集落で、息子さんが横浜に住んでいるという話を聞きました。息子さんは帰ってきますかとたずねると、帰ってこないという返答でした。ということは20年後ここは空き家になりますね、という話をしました。こちらの家はどうですか、息子さんは帰ってきますか、という形でずっと聞いて回ると、10年後、20年後、30年後にどこが空き家になるか分かります。今のままだと、30年たつと数件しか人が住んでいない状態になります。

30年後に全部集落を閉じるのか、それとも今、元気なうちに集落の活性化案をするのか。これは集落に住んでいる人たち自身が決めることですから、その話し合いをきちんとやっていかなければいけません。もしやる気があるのなら、どんなプロジェクトがあるか。このことについてもやはり相談に

乗っていかなければいけない。今そういうことで各地域を回っています。

今、集落支援員制度に出ているお金が終わると、その人たちは自分で起業して集落を支援しながら仕事を続けていくことになります。下水道の会社を持っている人は、会社に戻って下水道の仕事で回りながら集落支援員をやればいいし、もっと違う人は、集落の中のよろず屋さんのようなことをしながら支援をやっていく。集落の蔵を見せてもらおうと、結構かわいいものがあったりします。全然お宝ではないのですが、30年前に買ったコップなど、インターネットで販売すると500円程で売れるようなものがあります。こういうのを集落支援員の人たちが集落の人たちから預かって、きちんと売って、自分たちが食べていくためのお金を得つつ、集落の人たちに対してもお金をきちんと回していける仕組みを作っているところです。

## 7. まとめ

最初にお話ししたとおり、今までのように住民から潤沢な税金が集まり、その税金の分、行政が公共的な事業をやって、公益的なメリットを住民に返していくという循環は望めない時代になってきています。住民から直接入ってくるのではなく、交付税として入ってくる場合でも、これから使えるお金はどんどん小さくなっていきます。生産年齢人口が減っていくことは、税収が減っていくということですから。小さくなったら将来世代の税金を前借りしない限り、小さくなったものでしか公共事業ができないという理論です。だから行政がやれることは、これまでよりは少なくなっていく中で、これまでと同じように公益的なメリットを出していこうとすれば、住民にやはり何らかの形で支えてもらわなければいけません。住民がどういう力を出してくれるか、ここのデザインが結構大事になると思います。住民の人たちに「掃除してください」「ボランティアで何々してください」というだけなら、そんな要求はなかなか聞いてくれません。「そもそも行政がやるべきものだ」という感じになってしまいます。やはり自分たちがやりたいと思うことで生き生きと活動してもらい、結果的に公共的な役割を担っているというところにどう結び付けていくか、ここのデザインは非常に大事になってくるだろうと思います。コミュニティデザインとして僕らがかかわっているのは、まさにこの部分だと思うのです。この活動が楽しくてやりたいことをやっていたら、結果的に行政がやらなければいけなかったことを一部やれるようになって



ていたということに、どう組み合わせていくか。アイデアが要るだろうと思います。

「ここからここまでを掃除してください、看板を掲げていいですから」というだけでは、3年くらいたつと「なぜこんな所を掃除しているのだろう」という感じになってくる可能性があります。やはりそこでその人たちがやりたいことと、その場所を使ったのだから掃除をして帰りましょうね、ということとを、セットにしていくことが大事になっていくのではないかと思います。

姫路市家島で活動している「NPOいえしま」は、特産品を販売しています。あと「広報いえしま」という地域の広報誌も出しています。これはもともと家島町の役場がやっていたことなのですが、姫路市と合併して、広報誌が出なくなってしまうました。これに対し「NPOいえしま」という僕らも一緒に活動していたNPOが今、特産品販売の利益でやっているということです。NPOのメンバーである地域のおばちゃんたちは、その特産品を新しく販売して、都市の人たちに買ってもらうことがうれしくて仕方ないのです。それで自分たちの人件費も出すし材料費も出すし、余ったところを公共のために使うということを今やっています。

自分たちがやりたいことと公共的なものをどのように組み合わせていくかが大事になってくるのではないかと思います。究極的な目標は、もちろん行政の公共的な事業を成立させるということでもありますが、もう一つは緩やかな人のつながりをつくるということでしょうね。これまでまだ誰ともつながっていなかったという人たちが、何か役所がやるプロジェクトに参加し、それで公共的なプロジェクトに2～3年かかわった結果、あるチームを形成することになる。そのチーム内で弱いつながりがきちんとできているかどうかを僕は一番大事にしたいなと思っています。緩やかな、会社でも家族でもないようなつながりを地域の人たちの中で作ることができるか。何か悩んでいることがあるとき、ちょっと相談することができるかどうか、ここが非常に大切です。

日本では、うつの人が100万人以上いるし、自殺する人が年間3万人近くいます。誰かに相談したいのだけでも、家族が一番相談しにくいといわれています。『助けてと言えない』という本が出ていますが、家族には一番相談しにくい。非常に狭い強い結び付きは、その他のことを相談しにくいといえます。職場の関係が最たるものですが、職場の人に個人的な悩みは非常に言

いにくいですね。関係性が強ければ強いほど、話ができる内容は狭くなっていくということです。逆に関係性が緩ければ緩いほど、話せる幅は広がります。昨日あったこと、たわいもないこと、今ちょっと自分が悩んでいることを何でも相談できる仲間というのは、実は職場でも家族でもないということがよく言われています。例えば海士人宿をやるチームの中の弱いつながりは、彼らの悩みを相談したり、悩みに乗ってあげたりすることができるという関係性を生み出す結果になっているのではないかと思います。

人チームの中に若くして、乳がんになってしまった人がいます。放射線治療を受け、髪の毛が全部抜けてしまって、相当落ち込んでいました。そんな中で、同じチームのメンバーが「海士人宿をやると言ったのはおまえなのだから、きちんとやれ」と言って励ましては、チームで盛り立てていきました。今は治ってきたのですが、「やはりああいうチームがなかったら、あのとき自分の落ち込んでいた気持ちを整理できなかった。ああいうつながりがあったことで私は非常に救われた。ありがたかった」と言ってくれました。町の中でコミュニティデザインや人のつながりをデザインするというのは、究極的にはこれらのプロジェクトを介して、そういう人と人のつながりを作っていくということになるのではないかなという気がします。

かなり駆け足で話をしていきしましたが、この辺で僕からの話題提供は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。